

## 国宝高松塚古墳壁画修理作業室の専門家公開における主な意見

国宝高松塚古墳壁画修理作業室については、平成25年3月30日、31日及び平成25年12月26日に、考古学分野（考古学研究会、日本考古学協会、古代学研究会）、日本史学分野（大阪歴史学会、史学会、日本史研究会、日本歴史学会、歴史学研究会）、美術史学分野（美術史学会）、保存修復分野（日本文化財科学会、文化財保存修復学会）の専門家を対象に公開を行った。

以下に主な意見を整理した。

### ○壁画の状態について

- ・昭和47年(1972)3月の壁画発見時の発掘調査に参加したが、その際の印象としては、一つずつの色は同じような鮮やかさに見えた。顔料によって発見後の41年の間に違ってきているのではないか。目立つ色とそうでないものがある。カビによる劣化等ではなく、自然劣化という印象だ。漆喰<sup>しっくい</sup>のめくれ感もない。キトラのように、パラリとめくれる感じがなく、十分に保管されている。〔考古学〕
- ・平らな状態で見せてもらったが、かなり傷んでいるという印象を持った。〔考古学〕
- ・予想していたよりも保存状態はよい。しかし限界に来ており戻すことは考えられない。保存が第一である。〔美術史学〕
- ・第1回専門家公開の際に比べて、カビや漆喰の状況は改善されている。〔考古学〕
- ・壁画の状態は思ったほどひどくなく、安心した。〔日本史学〕
- ・発見時の画像と比べてショックを受けたのは事実だが、実物を見て絵画は立体であるという実感を持てた。〔美術史学〕
- ・実物を見てその繊細な表現を感じることができた。絹絵のような繊細さだ。これが保存されることを願う。〔美術史学〕
- ・貴重な絵画作品として現状が保存されるような方法を模索していただきたい。〔美術史学〕
- ・想像以上に痛みが激しかったということは実物を見てよくわかった。〔保存修復〕
- ・高松塚古墳壁画はフレスコ（ブオン・フレスコ）ではなく、白漆喰壁に絵が描かれている（フレスコ・セッコ）という印象をもった。イタリアなどの海外の壁画とは違うと感じた。〔保存修復〕
- ・高松塚古墳壁画は、劣悪な石室環境の中でよく残ったという印象を持った。イタリアの壁画もいろいろな条件で残っている。〔保存修復〕

## ○壁画の修理について

- ・クリーニングによって絵画は鮮明になったと思う。〔考古学〕
- ・修理をどこまでやるか、難しい問題だと思う。〔日本史学〕
- ・壁画を元に戻すのか、それとも現状の状態で保存するのか、修理後の保存活用の方針が決まらないと、修理の手法も定まらないのではないか。〔保存修復〕
- ・拝見するたびに、クリーニングの進み具合を実感している。〔保存修復〕
- ・東壁青龍に見られるような褐色の汚れが問題であろう。それによって石灰がかなり侵食されている。鉄イオンによるカルシウムの溶解が見られる。また、星宿の金箔きんぱくの下にも空洞が見られる。できる限り、鉄イオンの除去を検討すべきではないか。〔保存修復〕

## ○石材の状況について

- ・凝灰岩と、その表面にある漆喰との関係が温湿度によってどのような影響を受けるのかが気になる。石材はやはりもろくなっているので、今後も対応を検討していただきたい。〔考古学〕
- ・石材のひび割れに対して、今後どのように対処していくのかは課題であろう。〔考古学〕
- ・石材へのストレスは進んでいるような印象もある。〔保存修復〕
- ・石材を立てるとするのは無理だと思う。〔考古学〕
- ・石室の形にして現地に戻すのは現実的には難しいと感じた。〔保存修復〕

## ○壁画の保存の在り方について

- ・遺跡としては元に戻すべきだ。保存の措置を執り、古墳の外形も元に戻すべきだ。とはいっても漆喰はふかふかで天井などは戻すと落ちるのが心配である。遺跡の価値を保つためにも現地に戻して公開しないのはやむを得ない。〔日本史学〕
- ・現地に戻さないという判断をする場合にも、その根拠を定量的に示す必要がある。個人的には、現地に戻すということは難しいと考えている。〔保存修復〕
- ・史跡だから保存しないといけないと言わないといけないのだろうが、現状では戻せないと思う。〔日本史学〕
- ・先のことが気になるが、現状を保っていただきたい。現状でも大変素晴らしい作品だ。これを現地に戻すという考えは逆に驚いた。いろいろな角度から検討を進めてもらいたい。〔美術史学〕
- ・現地に戻したとしても、戻した後で壁画が見えなくなってしまうケースもある。地震対策も必要である。〔考古学〕
- ・現地に戻すのはリスクであり、乱暴である。このまま保存するのがよい。地震があればひびも入るし剥落はくらくも起きる。〔美術史学〕

- ・組み立てられていたものを解体してしまうと、それを元に戻すことはかなり難しいことだと考えている。石室の形にして、現地に戻すのは現実的には難しいと感じた。〔保存修復〕

## ○壁画の公開活用について

- ・実物を見ないで、いろいろな意見を言うのではなく、実物を見た上で意見を述べさせていただけると、こういった機会は引き続き行っていただきたい。〔考古学〕
- ・今後起こりうる地震などを考えると、平置きのままにしておく方がよいような気がした。また、保存のことを考えると、実物の公開はしない方がよいと感じた。〔保存修復〕
- ・実物が公開できるのであれば、してほしい。〔保存修復〕
- ・現地に戻してもらいたいが、難しいのも分かる。しかし、一つ一つの壁画でなく、空間としてトータルに見たい。狭い空間に位置していたのだから、戻すと見られないのではあるがそれは仕方ない。〔日本史学〕
- ・壁画は飛鳥という歴史的な位置付けの中で保存活用してもらいたい。もっと古代史研究の中でやれることがあるのではないかと感じた。〔日本史学〕
- ・今まで高松塚の壁画は、唐の壁画の縮小版だと思っていたが、独自のものであることがわかった。壁画・石材の質感は実物を見ないとわからない。この質感が分かるような博物館環境での公開を望む。〔美術史学〕
- ・これまで絵画としてのみ見ていたが、平置きによって公開する方が、壁画が石室石材と一体であることが分かってよいのではないかと感じた。〔美術史学〕
- ・展示の仕方を工夫すれば現状について一般の理解を得られるのではないか。平置きなどの安全な方法で現状を残してほしい。〔美術史学〕
- ・壁画の保存にはハードルはあるが公開すべきである。退色は避けられないが一般の国民が見ないまま退色するのは問題なので、一般公開するのがよい。そうやって国民の理解を得ていくことが必要である。公開の方向性を配慮してもらいたい。〔美術史学〕
- ・平面的な作品というよりも、実物はマテリアルとしての質感を強く感じた。イメージばかりが先行しているが、そのように物の状態を見られることが公開の意義と感じた。〔美術史学〕
- ・色の劣化を進めない方法としては、暗くして見せないのが一番良いが、保存と活用をすりあわせる必要があるのだろう。新しいデータを増やしていくのは当然として、現状を踏まえて剥落を防ぎながら処置をしてほしい。公開は限定的に行ってほしい。〔美術史学〕
- ・以前より大変見やすくなった。別の所で見やすいように活用すべきである。何らかの形で研究できるようにしてもらいたい。〔美術史学〕
- ・保存科学やデジタル技術の進歩によって新しい調査成果を将来的に得るためにも、現在のままで保存しておくのがよいのではないか。本物を見ることにより研究が起

きる。そのようにして若い人にもチャンスを与えるべきだ。一度出されてしまった以上、原状に戻さずに保存し、人を育てるべきだ。〔美術史学〕

## ○その他

- ・現地にある墳丘をどうしていくのかも検討課題であろう。〔考古学〕
- ・高松塚壁画は、現在、博物館環境で保存管理しながら修理を進めているが、他の装飾古墳に知見を提供するというのであれば、かなり環境が異なるのではないか。〔保存修復〕
- ・高松塚での取組は失敗例ととらえられることが多いが、いろいろな調査研究が進むきっかけともなった。知の集積の在り方が後の世のモデルケースとなればと思う。〔美術史学〕
- ・保存科学の技術的な進展について教育の場に活用できないか。保存修理の技術的なことについても知る機会を設けてほしい。〔日本史学〕
- ・今回文化庁の高松塚関連のホームページなどを拝見したが、情報公開がしっかりなされていると感じた。〔美術史学〕
- ・保存については今まで他人事のように感じていた。我々美術史の研究者も当事者意識をもって考えていきたいと感じた。〔美術史学〕